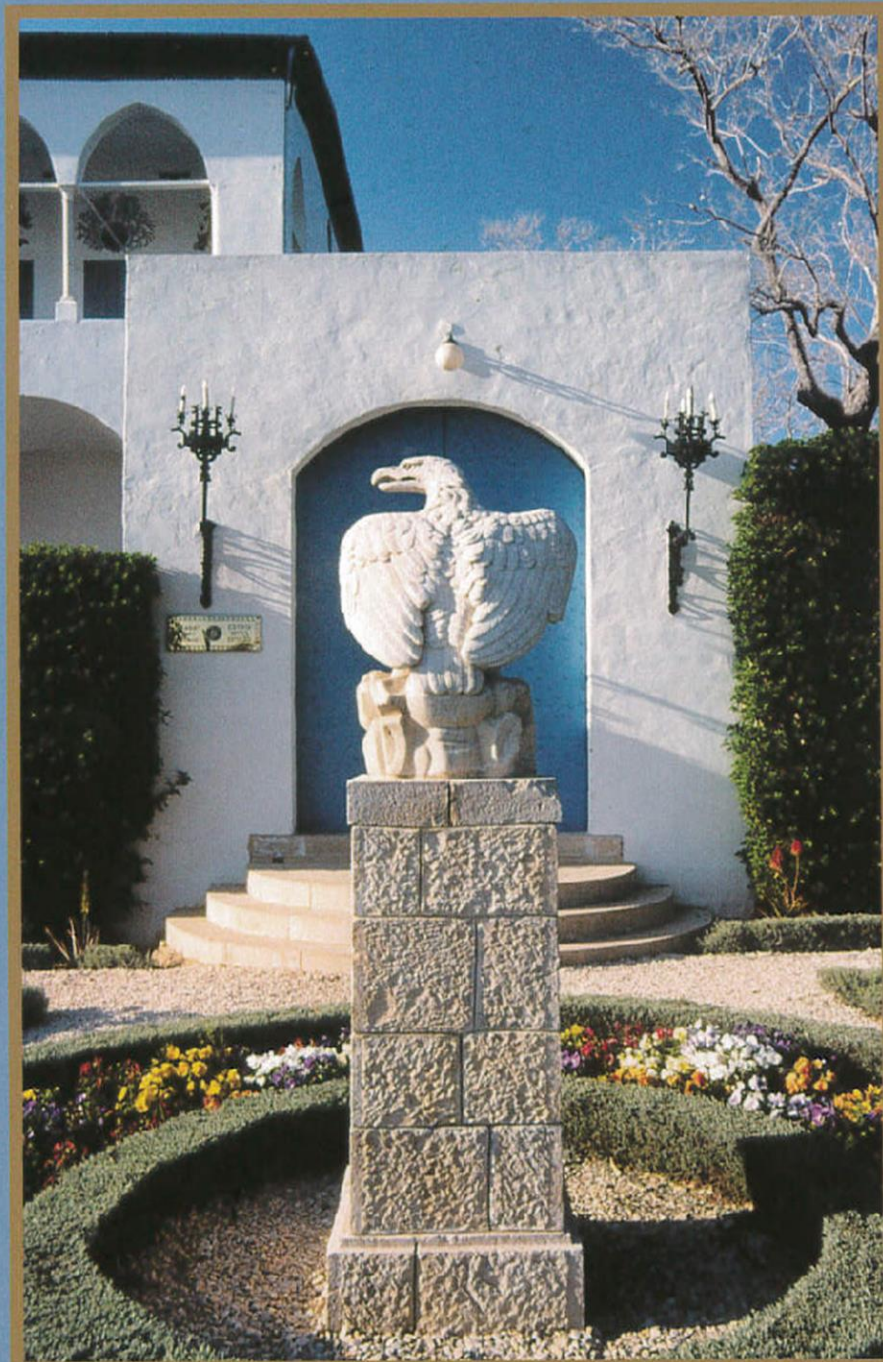




BAHÁ'Í WORLD CENTRE

バハイ聖地訪問



巡礼に関する引用文

聖なる場所は疑いなく聖なる恩寵のほとばしりの中心である。なぜならば、殉教者や聖なる魂らと関連する場所に入り、心身ともに敬意を示すことにより、心は感受性で動かされるからである。（アブドル・バハの書簡より）

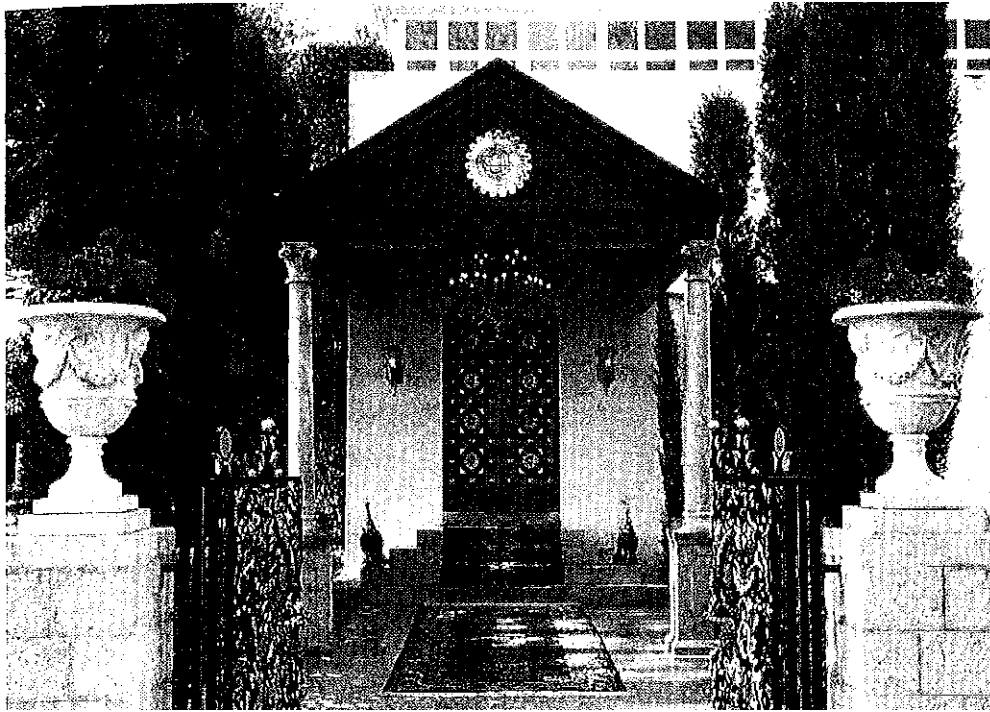
おお御国の布告者よ！神に感謝せよ。なぜならば、汝は「祝福された地点」を訪れ、聖廟の敷居に頭をつけ、精神的領域の住人らが崇敬に周りを回る聖域への巡礼を果たしたからである。汝は慈悲深き御方の会合に入ることを許され、アブドル・バハとの霊的交わりを果たした。汝は完全なる親睦と幸福のうちに日々を過ごし、その後帰国を許された。．．．それにより汝が、御国への奉仕に従事し、人々を天の和合に導き、万軍の主のもとに先導せんがために。（アブドル・バハの書簡より）

おお「聖なる塵」の巡礼者よ！もっとも栄光に満ちた主なる神に大いに感謝せよ。なぜならば、主は汝をこの道に導き、全知者の聖域に入ることを可能ならしめ給うたゆえに。また、主は、恵み深きご好意のもとに汝を加護し、神の選ばれし者らの望みと願いを得ることを可能ならしめ給うたからである。（アブドル・バハの書簡より）

敬慕する大業を教え広めるあなたの努力が最大の成功を収められるよう、私は心から願っております。また、あなたがいつか聖地への巡礼を果たし、バハイの聖廟を訪れることにより、信教の使命と意義についてより明確なビジョンを得られるだろうと信じております。（ショーギ・エフェンディの肉筆による追伸より）

聖廟を訪れて帰ってきたばかりの巡礼者と接触すると、行政会は新しい生命力と精神を得ます。巡礼者は、聖なる敷居にひざまずき、祈りと瞑想に浸されている間に得た精神の一部を、出会う人たちに放散することができます。（ショーギ・エフェンディの代理による手紙より）

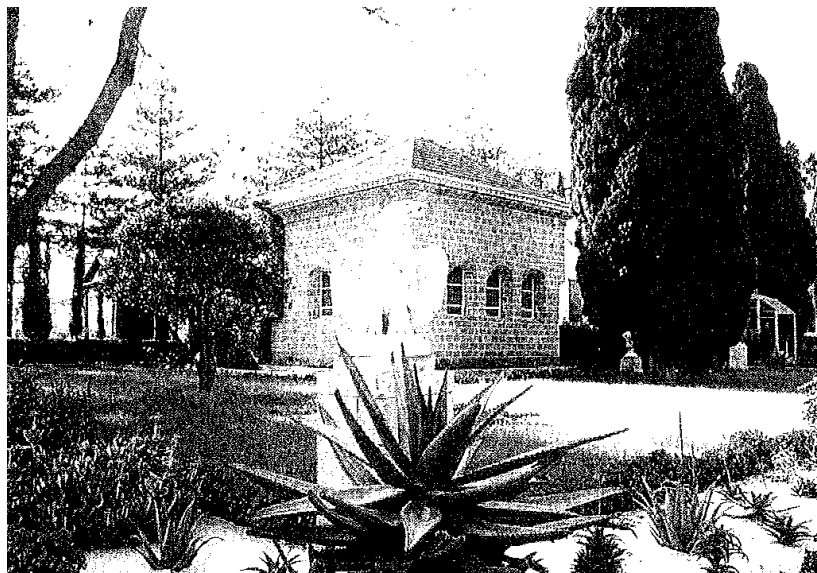
彼（守護者）は、あなたが聖地を訪問され、光明に満ちた聖廟の敷地内であなたと親睦を深められたことは、この上ない喜びであったとおっしゃっておられます。この巡礼を果たし、天上の群集がその周りを回る地点であるアブハの美の聖なる敷居、そしてバブの廟とアブドル・バハの廟で援助と恩寵を乞う祈りを捧げた後、あなたがよりすぐれた栄光に満ちた奉仕を捧げる特権を与えられることは間違いありません。（ショーギ・エフェンディの代理による手紙より）



バハオラの霊廟

「ゲブレとは、まことに神が現したまうであらう御方のことである。彼が休止するまでは、ゲブレは彼と共に動くのである。」¹
(バハオラ)

「われは ... 必須の祈りを汝らに命じた。われは、神の書の命令として、より多くの数を唱えることを免除した。 ... この祈りを捧げたいと欲するときには、わが量も神聖なる面前の宮居に向かえ。それは、神が、その周囲を天上の群衆が回る中心点となし、永久の、諸々の都市の住人らのための崇敬の点と定め、天と地にいるすべての者への命令の源として定め給うた、この聖なる地点である。そして真理と発言の太陽が沈んだ後には、われが汝らのために定めた地点へ顔を向けよ。まことに彼は、全能にして、全知であり給う。」² (バハオラ)



1892年5月29日、バハオラは昇天され、その日没直後、バハオラのご遺体は、彼の義理の息子セイエド・アリ・アフナン宅の最北端に位置する部屋に安置された。その聖なる邸宅とそれに隣接する建物は、長い間バハイ信教の聖約の破壊者らに占拠されていたが、ついに1920年代初め、その霊廟の恒久的管理権はバハイ共同体の長としてのショーギ・エフェンディに与えられた。彼はその廟の入り口を改善し、1940年に屋根付き柱廊を付け足し、1957年に彫刻を施したオークの扉を設置された。

「今、バハイ世界のゲブレの中心部へは、『聖なる境内』を通り抜けて行けるようになった。この『聖なる境内』には、『聖なる御宮居』、外側と内側の聖域、『祝福された御敷居』、『最奥の聖域』がある。」3（ショーギ・エフェンディ）

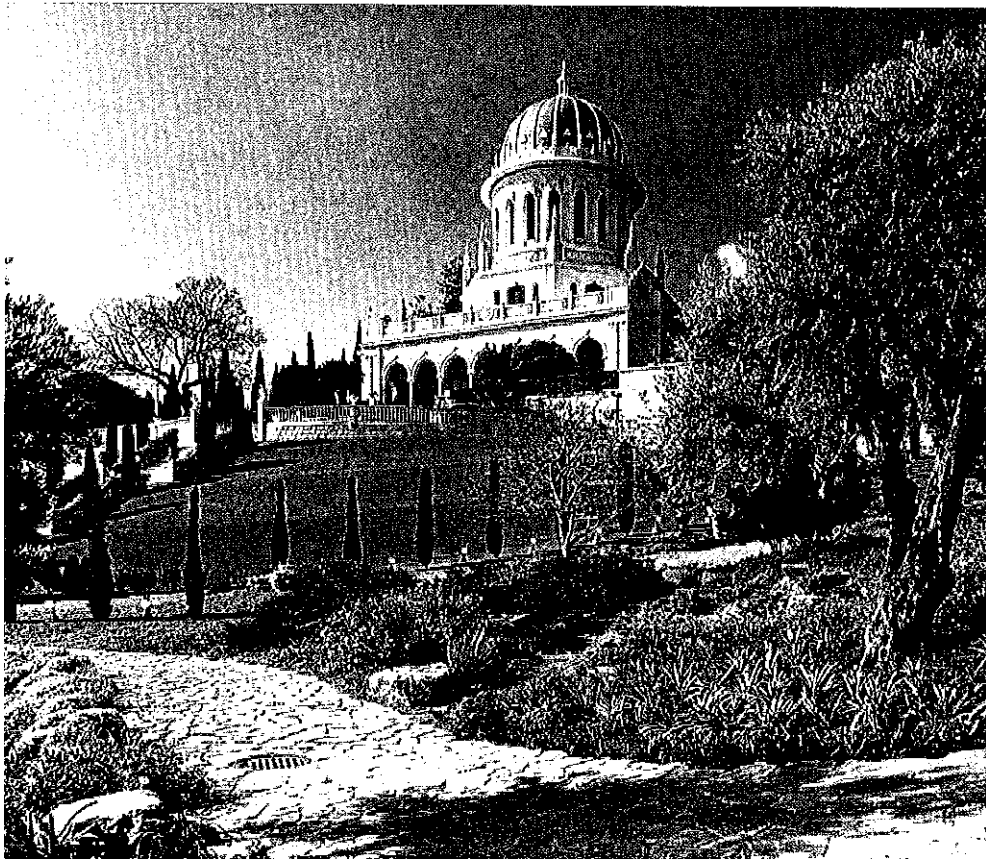
「このメッセージで述べられている『聖なる境内』とは、バハオラの霊廟の東側にあるバハオラの邸宅とその霊廟を囲む庭園や土地を含めた、バージにある信教の所有地を指す。

「『聖なる御宮居』はハラミ・アクダスである。造園された敷地と整備された庭とから成り、バハオラの霊廟と邸にふさわしい入り口となっている。これは、時に守護者により廟の外なる聖所と呼ばれている…

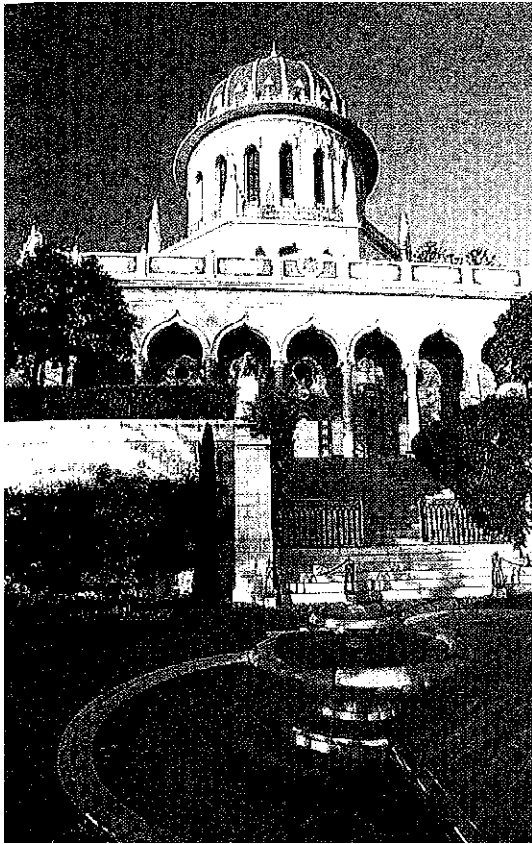
「『外なる聖所』は、厳密に言えば、小さい中庭、門、柱廊式玄関、入り口に続く石段の部分指す…

「『内なる聖所』は、屋根が設置されている部分を指し、美しい中庭と絨毯で覆われた回廊から成る。ここは巡礼者や訪問者が起立した状態で祈りを捧げ、『祝福された御敷居』と『最奥の聖域』を見る場であり、守護者の言葉によると、地球が受け取った中で最も聖なる塵が納められている場所である。」4

バブの霊廟



「この広大なシステムの最も外側に位置する円、つまり、信教の先駆者（バブ）に付与された中軸の目に見える相対物が、地球全体そのものである。そしてこの地球の中心に位置するのが『最も聖なる地』であり、アブドル・バハはそれを『預言者たちの棲』と呼ばれた。聖なる地は世界の中心であり、国々が向かうケブレと見なされるべきものである。この最も聖なる地に太古より神聖なる山がそびえたつ。その山は『主の葡萄園』であり、バブご自身がその再来を象徴するヘブライの預言者エリヤの避難所でもある。その山に抱かれるように、美しく整備されたバブの聖なる埋葬地とそれを囲む閑静な境内が存在する。敷地内には、信教の象徴として世界的に知られるようになったバブの霊廟が立ち、それを階段状に取り囲む庭園はその境内を美しく飾り、その場所に独特な魅力を与えている。美しい緑に囲まれた庭園のなかに聳え立つバブの廟のたえようもない美しさは、アブドル・バハが信教の先駆者として殉教したバブのために建てられたこの建物を守るように包み込んでいる。このドームを外郭とした建物の中に、偉大な価値の真珠、最も聖なる御方が祭られる部屋がある。そこがバブの墓そのものであり、それはアブドル・バハによって建設された。この最奥の聖域に聖櫃を収める霊安所である霊廟がある。この霊安所に大理石の石棺が安置されており、その中には計り知れない価値を持つ宝石であるバブの聖なる塵が納められている。バハオラの『聖約の中心』であるアブドル・バハは、この聖なる塵があまりにも貴重であるがために、それを収める建物の周りにある土そのものをも賞揚なさり、それに秘められる力ゆえに、彼は、ご自身が当初建設した六つの部屋につながる五つの扉に、霊廟の建設にかかわった五名の信者の名前をつけられた。また、この塵が収められている建物を指し、『天上の群集』がその周囲を巡る場所であると述べられた。」⁵（ショーギ・エフエンディ）



「この貴重な預かり物が聖地に着き、アブドル・バハの元に届くや、彼はその同じ年に購入したばかりの地所へ行き、自らの手で建物の礎石を置かれた。カルメル山上のその地所は、バハオラが選ばれ、祝福された場である。廟の建設は礎石が置かれて数ヶ月後に始まり、それとほとんど同じ頃に、バブの遺体を安置する石棺が、アブドル・バハの提案で完成され、ハイファに送られた。その棺はラングーンのパハイたちの愛の印であった。」6（ショーギ・エフェンディ）

「アブドル・バハの解放というこの歴史的な布告からわずか数ヶ月後、まさにオスマン・トルコ帝国の君主アブドル・ハミドの没落したその同じ年、アブドル・バハは、テヘランに隠されていたバブのご遺体をカルメル山に移すという、彼の在位中の最も特筆すべき偉業の一つと数えられることを成し遂げられた。それを可能にしたのは天来の力であり、それはアブドル・バハが彼に与えられた神聖な権限を侵されることなく守り、父親の創始した信教を北米大陸に確立し、彼を迫害した皇帝に勝利することを可能とした同じ天来の力であった。アブドル・バハは機あるごとに、バブの遺体を安全に運搬し、それを安置するにふさわしい石棺を準備し、最終的に自身の手でバブの遺体を安住の地に埋葬すること、これが神託を受けて以来、ずっと自分が達成すべき目標の一つと見なしていると述べておられた。まことにこの達成は、パハイ最初の一世紀に起こった特筆すべき出来事の一つとして数えるに値するものである。」7（ショーギ・エフェンディ）

「すべてが終わり、シラズ出身の、殉教した預言者の遺骨が遂に、無事に神の山の中腹に恒久的に納められた時、ターバンと靴とマントを既に脱いでおられたアブドル・バハは、また蓋^{ふた}をしていない石棺の上に伏された。白髪が揺れ、御顔は神々しい輝きを増し、木の棺の縁に額をつけて、大声で泣かれ、あまりの涙に、その場にいた者らも涙にくれた。その晩、アブドル・バハは、感情のたかぶりのため、一睡もされなかった。」8（ショーギ・エフェンディ）

「彼（アブドル・バハ）は何度も、『我は数えきれない涙と、はなはだしい苦勞をし、その建物の石を一個ずつ、その建物に通じる道の石を一個ずつ、自分で持ち上げては置いた』とおっしゃった。目撃者は、アブドル・バハはある時こう語られたと証言している－『ある晩、我はあまりの心痛で、手元にあったバブの祈りを繰り返して唱える以外何もすることができなかったが、その祈りを唱えると大分気持ちが落ち着いた。すると、次の朝、その土地の持ち主自らが我のところに来て謝り、どうか自分の土地を買ってほしいと嘆願してきたのである。』」9（アブドル・バハ；ショーギ・エフェンディによる引用）

「アブドル・バハはこの栄光の勝利を、ある書簡で信者たちに次のように知らせておられる－『最も喜ばしい知らせはこれである。聖なる輝かしいバブのご遺体は、敵の勢力への懸念と妨害への恐れから、60年間もあちこちの場所に移動させられ、安らぐ時はなかったが、アバハの美の恵みによりノウ・ルーズのこの日、肅々とカルメル山の廟堂の聖なる棺に納められた。奇遇にも、同日、アメリカ大陸の国々から選ばれた代議員がシカゴに集まり、マシュレゴウル・アズカル建設に

合意だけでなく、その地所も決まると知らせる電報がシカゴから届いた。』10 （アブドル・バハ；ショーギ・エフェンディによる引用）

「私（ショーギ・エフェンディ）はこの時点で、こう断言する。つまり、神の葡萄園の胸に抱かれる聖なる塵の神聖さについていくら強調してもし過ぎることはできない。また、我らの信教の創始者が御心の働きに沿ってあの聖なる山に赴かれた歴史的な機会に、確固として選定された場所に、60年前に基礎を据えられたこの強大な建物のもつ想像を絶する可能性についても高く評価し過ぎることはない。さらに、この建造物の上部構造の建設が前例を見ないほどの推進力を与えるよう確定されており、バハオラの信教の世界行政センターの進展、および今はまだ胎芽期にある未来の世界秩序を構成する最高機関の開花の過程で果たすよう定められている、この建物が担う役割は、重視し過ぎることもできない、と。」11 （ショーギ・エフェンディ）



アブドル・バハの霊廟

「聖なる棺はバブの霊廟の東側の入り口近くで平らな場所に置かれ、ハイファ市のイスラムの高僧を含めた、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教の代表者九名が、大勢の群衆の前で弔辞を述べた。それが終わると、高等弁務官が霊廟に向かって頭を下げながら棺に近づき、アブドル・バハに最後の表敬を示し、他の政府高官がそれに続いた。それから棺は霊廟の中に移され、バブのご遺体の眠る墓所に隣接する安置所へ、悲しみのうちに、しかし恭しく納められた。」14 （ショーギ・エフェンディ）

「バブの大霊廟の一室にアブドル・バハご自身が埋葬されたことで、その山の神聖さはさらに増した。ハイファ市では初の発電施設が設置され、アゼルバイジャンの監獄では『明かりひとつさえ』与えられなかったとバブご自身が述べられた、その御方の廟を明るい光が満たした。彼（アブドル・バハ）の廟として用いられる部屋に続いて三つの部屋が完成したことで、この建物の最初の区画がアブドル・バハの計画通り完成した。埋葬地を囲む広大な敷地は、聖約の破壊者たちの陰謀にもかかわらず、カルメル山の尾根から山の麓に並んでいるテンプル・コロニーまで続き・・・これらは、国際的な諸機構のすばらしい成長と信教の世界センターの恒久的な設立を示す最初の一步と考えることができよう。」15 （ショーギ・エフェンディ）

ペルシアからの追放

「バハオラをペルシア国内から即刻に追放するというペルシア国王の勅令は、バハイ最初の一世紀の歴史における、新しく輝かしい一章の幕開けであった。」16 (ショーギ・エフェンディ)

「人々を惑わし邪道に導いたという罪に問われた国外追放者らは、厳しく監禁するようにという明確な命令がトルコ皇帝と大臣らから発せられた。終身禁固刑という処分では根絶するだろうという予期が自信ありげに表明された。AH1285年ラビウタニの5日(1868年7月26日)付けで交付されたソルタン・アブドル・アジーズの勅令は、彼らを永久に国外追放にするだけでなく、厳しく幽閉し、地元民をはじめ仲間同士とも交わることを堅く禁じた。勅令は市民への警告として、国外追放者らの到着と同時に、その町の主要なモスクで読み上げられた。」17 (ショーギ・エフェンディ)

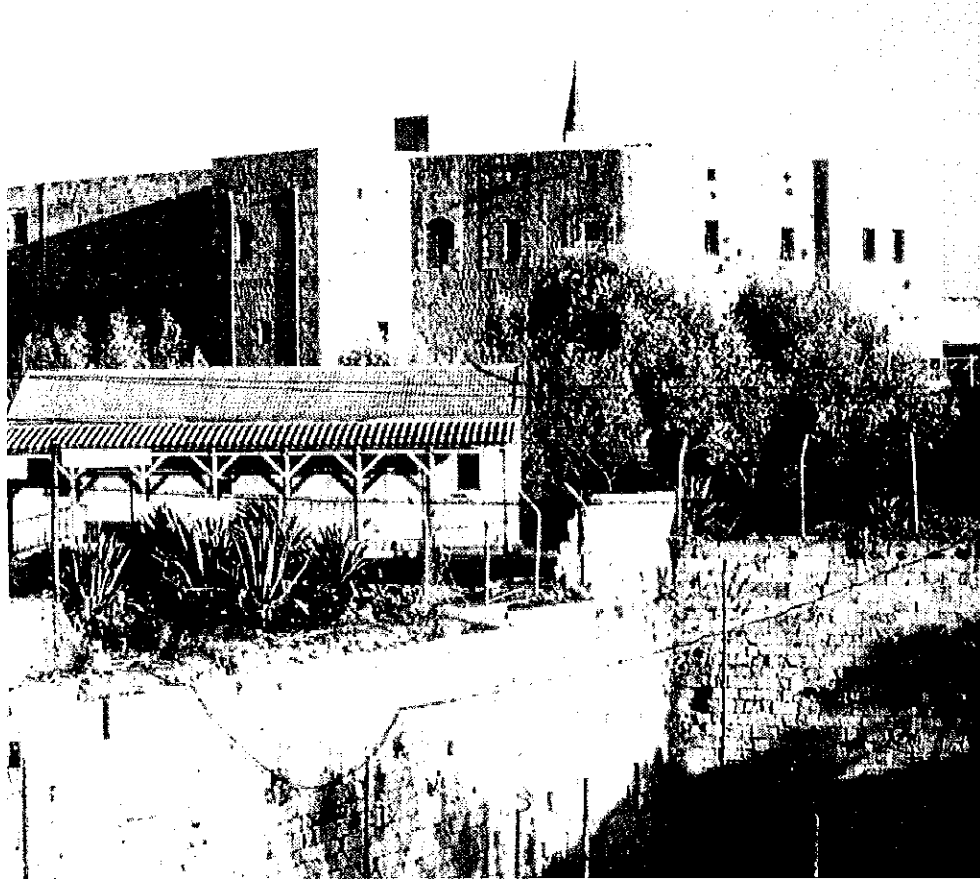
「AH1285年ジャマデイユル・アヴァルの2日(1868年8月21日)の朝、彼らはオーストリア・ロイド社の蒸気船に乗り、アレキサンドリアへ旅立った。その行程中、マデリを通り、スミルナ(現トルコの都市)に二日停泊した。その時ジァビムニール・イスムラフルマンは重病にかかり、無念にも入院することとなり、その後まもなく他界した。アレキサンドリアで同社のハイファ行き蒸気船に乗り換え、ポートサイドとジャファで停泊後、下船し、数時間後には帆船に乗り、アッカへ向かった。アッカに到着したのは、AH1285年ジャマデイユル・アヴァルの12日(1868年8月31日)のことであった。」18 (ショーギ・エフェンディ)

アッカへの到着

「バハオラのアッカへの到着は、彼の40年に亘る使命期間の最後の段階の幕開けであり、実にそれは、彼の流刑の全期間の頂点でもあった。」19 (ショーギ・エフェンディ)

兵舎

「この兵営における牢獄生活の期間、外部からの訪問は厳重に禁じられていた。イランの数人のバハイたちは崇敬する、自分たちの指導者の顔を拝したいと徒歩はるばる訪れてきたが、市の城壁内に入ることは許されなかった。そこで彼らはよく、第3の堀の外側の原っぱへ行った。その場所からはバハオラの獄舎の窓を見ることができた。バハオラもまた、その窓のところに姿を現された。訪問者らははるかに彼を見つめて涙し、犠牲と奉仕への熱情を新たに燃え立たせて帰路についた。」20 (エッセルモント)



「刑場であるアッカへの到着は彼（バハオラ）の苦悩の終わりではなく、むしろより重大な国面の始まりであった。それは、耐え難い苦難、厳しい制限、激しい混乱に特徴付けられ、その脅威はテヘランのシア・チャール（地下牢の名）での苦悶をも凌ぎ、アドリアノープルで信教を動揺させた内部の動乱を除き、信教の歴史で他に比べるものはない程であった。バハオラは、かの牢獄都市への投獄の最初の九年間の切迫した状態を強調して、次のように述べておられる－『このことを知れ。この地に到着したとき、我はこれを『偉大なる牢獄』と命名した。我はそれ以前に他の地において鎖と足かせを着けられたこともあったが、その地をこの名で呼ぶことはしなかった。このことについて熟考せよ、おお、理解力を有する者らよ』と」。²¹（ショーギ・エフェンディ）

「悲惨な船旅の後、アッカで船を下りた流刑者らの全員、男女、子供は、『ペルシャ人の神』を見ようと港に集まった民衆の好奇と無情の目にさらされながら、兵舎に連行され、そこに拘禁され、警備のため番人が配置された。バハオラは『ローハ・ライス（為政者への書簡）』の中で『最初の晩、誰にも食物や水は与えられなかった。…彼らは水を求めたが拒否された』と書いておられる。」²²（ショーギ・エフェンディ）

突然の悲劇

「これら艱難の悩ましい重圧に、突然の悲劇による激しい悲しみが加わった。『最も純粋な枝』と呼ばれた、高貴で敬虔なミルザ・メッディの余りにも若い死である。アブドル・バハの弟、メッディはその時 20 歳であった。彼は子供の時、バハオラがスレイマニエから戻られた後に父親（バハオラ）と家族に合流するためテヘランからバグダッドへ連れ来られて以来、バハオラの秘書であり、また流刑の伴侶であった。彼はある日の夕暮、いつものようにお祈りをするため獄舎の屋上

を歩いていたが、天窓から転落し、床にあった木箱があばら骨に刺さり、22 時間後のイスラム暦 1287 年ラビウル・アヴ
アル 23 日（1870 年 6 月 23 日）に没した。彼は臨終の間際に、『最愛の御方』の御前に到達することができなかつ
た人々のために自分の命を受け入れてほしいと、悲痛の『父親』に懇願した。」23（ショーギ・エフェンディ）

「...まさにこの瞬間、『最も偉大なる牢獄』で息子を我らの犠牲とした後、わが息子は面前から運び去られようとしてい
る。その時、アブハの幕屋の住人達は大いに涙し、約束された日の主に在す神の道でこの若者と共に投獄された者ら
は嘆いている。このような状況にあっても、わがペンは止まることを知らず、全人類の主、その主を思い起こすのである。
それは人々を、全能にして、全てに恩寵深き神に招喚する。この日は、バハの光により創造された者、この投獄され敵
の手にある者が殉教した日である。」24（バハオラ）

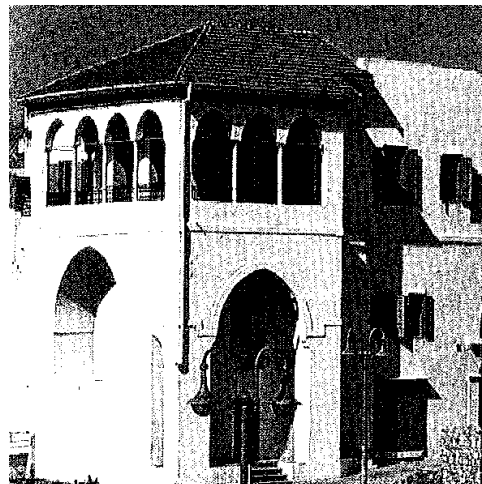
「おお、わが神におわす主よ、御名に誉れあれ。あなたは、私がこの日、この牢獄に幽閉され、あなたの敵共の手に落
ちているのを見給い、あなたの御顔の前で塵の上に横たわるわが息子（『最も純粋な枝』）を見給う。おおわが主よ、
彼はあなたの僕であり、あなたご自身の顕示者、あなたの大業の曙である御方に結びつけ給うた者であります。

「彼は誕生の瞬間から、あなたの取り消すことのできないご命令を通して自身に定められたところに従い、あなたとの離
別に悩まされました。そして彼があなたとの再会の杯を飲みました時、彼はあなたと御印を信じたがために投獄されまし
た。彼はこの最も偉大な牢に入るまで、あなたの美に奉仕し続けました。おおわが神よ、そこで私は、あなたの道に彼を
犠牲として捧げました。あなたは、あなたを愛する者らが耐えてきたこの苦難を十分に知り給う。この苦難は、地上の
人々を嘆かせ、『天上の群集』をも悲しませております。

「おおわが主よ、私は彼と、彼の追放と、彼の投獄とにより嘆願いたします。彼を愛した者らの心を鎮め、彼らの働きを
祝福するものを彼らに下し与えたまえ。あなたは御心のままになす力を持ち給う。あなたの他に神はいまらず、あなたは
強大にして御力に満ち給う御方に在します。」25（バハオラ）

アブードの家

この家はアッカ市内の地中海に面したところに建てられている。この家はもともと、ウディ・カンマールの家であったが、カン
マールの甥のアブードと一緒に住むようになってウディ・カンマールの家とアブードの家と呼ばれるようになった。カンマール
はバージに大邸宅を建てたのでこの家が要らなくなり、バハオラ一行に貸すことになった。アブードは反対して自分の家

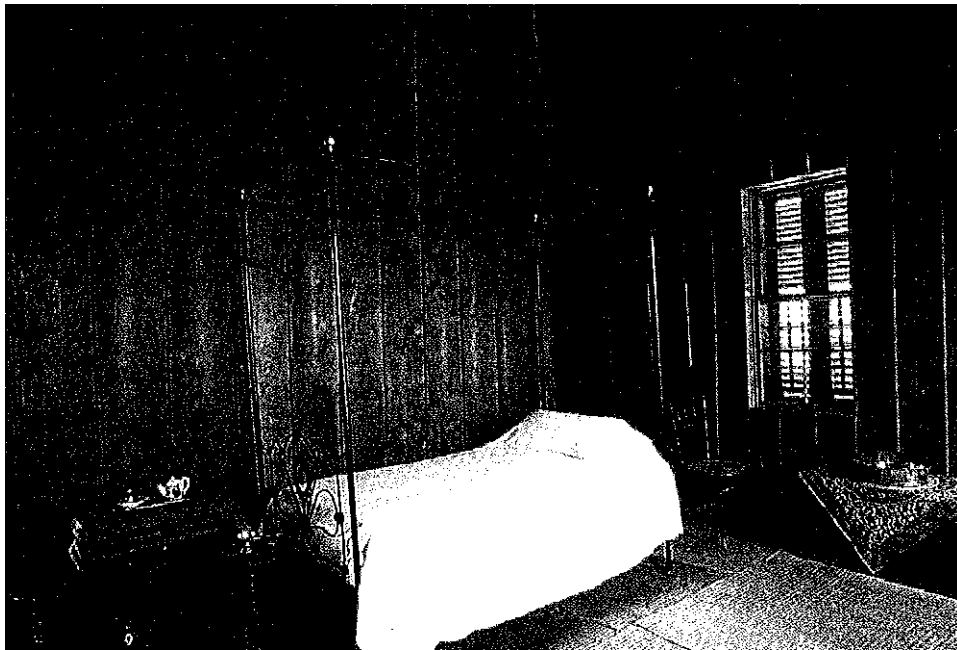


を仕切りで分けた。バハオラの家族は大家族で、手狭なこの家で一部屋
に男女 13 名と一緒に住むことになった。バハオラはこの家で「アグダスの
書」を著され、アブドル・バハはムニレ・カヌームと結婚された。アブドル・バハ
が結婚されるという話をアブードが知ると、アブードは彼の家を空けてアブド
ル・バハに貸し出した。それをきっかけに、住宅事情は改善され、それから
この家は「アブードの家」と呼ばれるようになった。バハオラはこの家に 1871
年から 1886 年までの 15 年間住まわれた。アブドル・バハの家族は 1871
年から 1896 年までの 25 年間住まわれた。バハオラの奥様はこの家で
1885 年に亡くなられた。この家に住んでいた 25 年間にはいろいろの出来
事があったが、最大の事件は聖約の破壊者のアザリ派の 3 名の殺害事

件であった。バハオラはアブードの家からバージの邸宅に移り住んだ後も、時折、アブードの家を訪れている。バハオラがバージで昇天された時も、アブトル・バハの家族はこの家に住んでおられた。

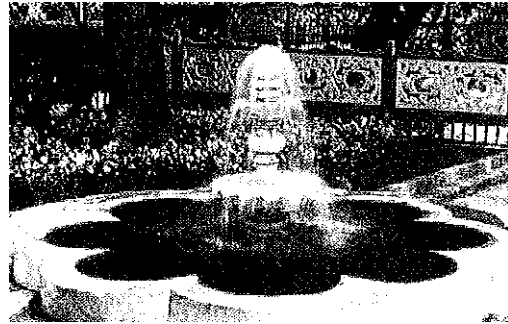
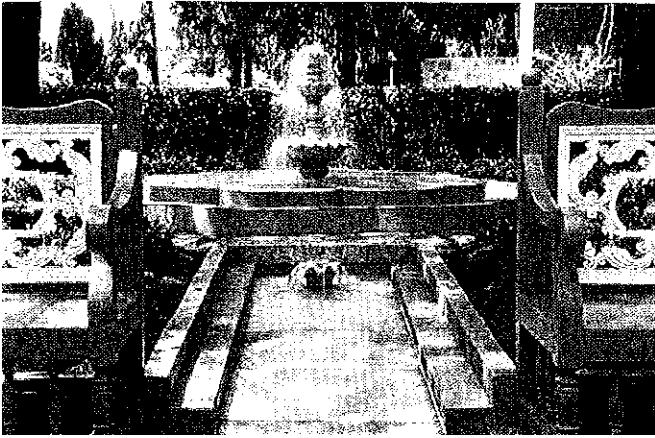
「ケタベ・アグダス」

「バハオラが敵やバハイ信教の信奉者らの謀^{はか}った行為によって様々な苦難^{さいな}に苛まれていた時期、ウディ・カマルの家へ移されてまもなくの頃（1873年ごろ）に著されたこの書は、バハオラの啓示の貴重な財宝を納めた宝庫である。この書にはそれが説く原則、それが定める行政の機構、その著者が指定した後継者に付与された機能が規定されているが故に、世界の他の聖なる書に比べるものがないほどの独自の位置を占めるものである。」27（ショーギ・エフェンディ）



レズワンの庭園

「アッカのモフティ（イスラムの高僧）、シェイク アリイ ミリはアブドル・バハの提言でバハオラのもとに赴^{おもむ}き、9年間にわたる牢獄都市の塀内への幽閉を終結させるよう、バハオラに熱心に懇願した。バハオラは遂に懇願を受け入れ、塀の外に出られた。町の東方にある川の中州にあるナマインの庭は、レズワンという呼称を授かり、バハオラにより『新しいエルサレム』、『新緑におおわれたわが小島』と呼ばれた。この庭園はアッカの北2、3マイルに位置し、アブドル・バハがバハオラのためにアブドラ・パシャの邸宅と一緒に賃借され、準備された。町を囲む塀の外へは10年近く一步も出られることがなく、唯一の運動と言え、ご自分の寝室の中をゆっくりと歩くことだけであったバハオラにとって、この庭園は、お気に入りの憩いの場となった。」28（ショーギ・エフェンディ）



「彼こそは神におわします。彼に賛美あれ。崇高と権威は彼のものなり。

「あの祝福された金曜の朝、我々は邸宅を出て庭園へ行った。すべての木は語り、あらゆる葉は歌い、木々は『神のご慈悲の証拠を見よ』と宣言した。対を成す小川は、『万物は我らから生命を与えられた』という聖句を雄弁に唱えた。神に賛美あれ！ 神秘は彼らによって語られ、それは驚嘆を引き起こした。我は考えた－彼らはどの学校で教育され、誰のもとで学びを得たのであろうか？ 実に！ 虐げられし御方は知り、述べる－『全てを包み給い、ご自力にて存在し給う神からである』、と。

「我々が着席すると、ラディイ－彼女の上にわが栄光あらんことを－がそなたの代理で出て来た。彼女は神の恵みの食卓を用意し、そなたの名で皆をもてなした。実際、食欲をそそり、目を楽ませる物はすべて供えられ、実に、木の葉が神のご意志で揺り動かされるように耳を楽しませるものも聞かれた。そしてこの動きから、この宴にいなかった者を招く喜びに満ちた呼びかけをあたかも発するかのような爽やかな声が上がった。神の威力とその創造の完璧さは、咲き誇る花々や果実、木々、葉や流れの中にも楽しくも見る事ができた。このように、そなたと彼女に確証を与え給うた神を称えよ。

「要するに、庭園にあるすべてのものは選り抜きの恩恵の受領者であり、自分たちの主に感謝を捧げるものである。ああ、神に愛されるすべての者らが、この日に参列できたならば！

「我は、崇高におわす神に懇願する。御前より、常にそなたの上に祝福とご慈悲と聖なる恩寵とを下し給うように。神は許し給う御方、すべてに栄光ある御方におわします。

「我は彼の愛し給う者らに挨拶の言葉を送り、彼らの一人一人が言及され、彼の御前で受け入れられるに相応しい者となるよう嘆願する。そなたと神の誠実な僕らの上に平穏あれ。全人類の主に誉れあれ。」29（ショーギ・エフェンディ）

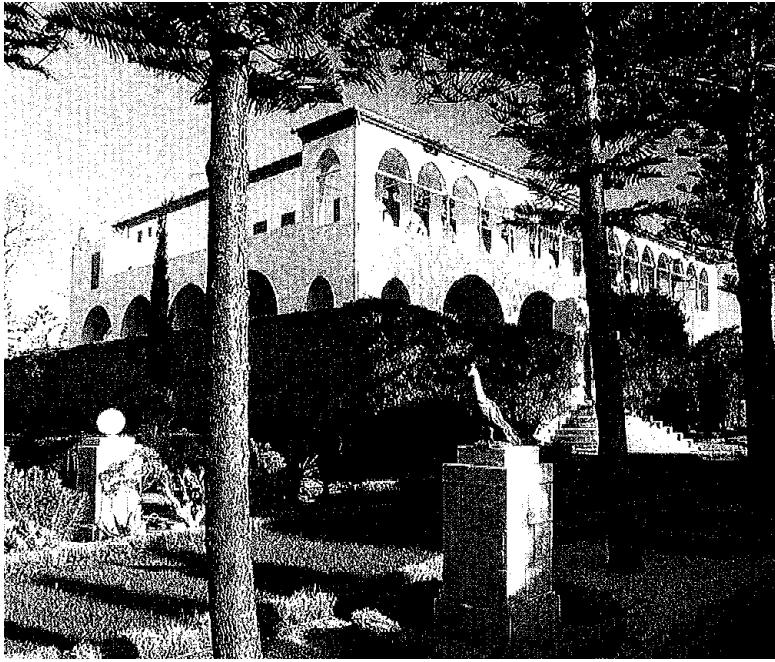
マズラエの家



「バハオラは田舎の美しさと新緑を愛された。ある日、彼は次のようにおっしゃった—『我は9年間、青葉の生い茂った景色を見ていない。田舎は魂の世界であり、町は肉体の世界である。』これを人づてに聞いたとき、私はバハオラが田舎を愛されていることを知った。そして、私がバハオラの願いを実行するためならば、すべてのことが成功するであろうと確信した。その頃、アッカには、私たちを強く否定していたモハメッド・パシャ・サフワトという男性がいた。彼は町から北へ4マイルのところに、庭と小川に囲まれた美しい場所であるマズラエという邸宅を所有していた。私はその家を、年間約5ポンドという低価格で借り、彼に五年分の賃料を支払い、契約を交わした。そして、その邸宅を修理し、庭を整え、浴室を作るため、労働者を派遣した。そしてまた、『祝福された美』のために馬車を用意した。」30（アブドルバハ）

「友らに知らず。50年以上経過後、カスル・マズラエのカギがイスラエル当局より渡される。牢獄都市アッカを去った後バハオラが住まわれた歴史的な住居が修復。じきに巡礼者のために扉開かれん」。31（ショーギエフェンディ）

1973年3月、万国正義院はさらなる朗報を電報で送った—「バハイ紀元130年ノウ・ルーズ、バハイ世界にマズラエの邸宅購入の吉報知らず」。31 マズラエの家は、アブドル・パシャの子孫から購入され、聖地のバハイの財産への貴重な追加となった。そして、1980年9月、邸宅の北東側にある土地が庭園拡大のために新たに購入された。万国正義院の電報には次のように記されている—「急速に開発される地域にてマズラエの邸宅を守るため、邸宅の北側に隣接する、5万平方メートルの農地を新たに購入。」33



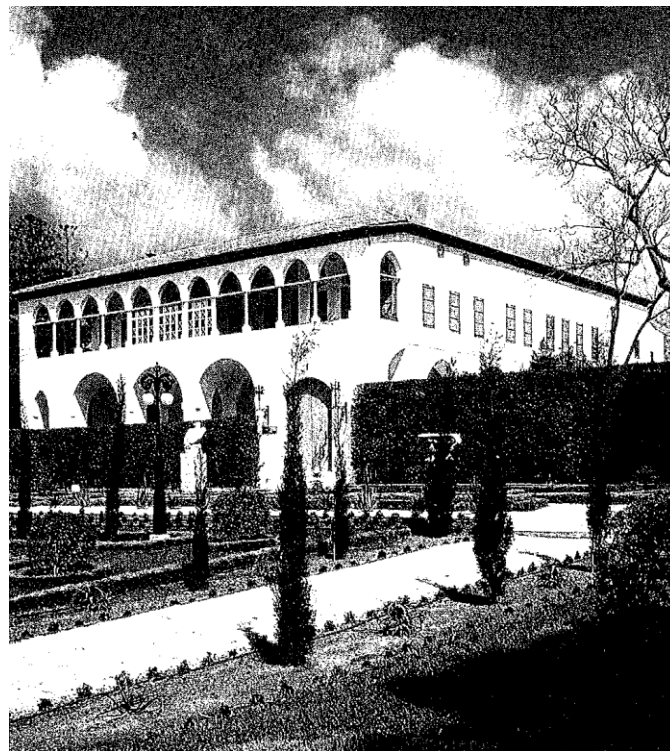
バージの邸宅

この邸宅は 1871 年にアッカの提督アブドラ・パシヤによって建てられたが、後に、アッカの商人ウディ・カンマールに買い取られた。1870 年に大改修された。1879 年この辺にペストが大流行したので、家族一同は他の家に移って空き家になっていたため、アブドル・バハはバハオラのためにこの家を借りた。バハオラは、この家で「狼の子への書簡」その他多くの書簡を著した。バハオラは 1929 年この家で昇天された。

(写真の左に見える建物がバハオラの館)

この邸宅はその後、聖約の破壊者によって占拠されていたので内部が大分荒廃してしまった。1929 年守護者ショージ・エフェンディはこの

マンションをバハイの手に取り戻した後、大修理を行い、また、近辺の土地を買収して庭のデザインを計画し、美化に努めた。現在、バージの館には展示物が飾られ、バハオラの寝室も昔のままに保存されている。この館の内部見学は 9 日間の巡礼者と国際大会の代表者だけ訪問する事が出来る。3 日間の短期訪問者にはその内部は開放されない。(バハオラの館の内部広間は展示室になっている)



かの有名な東洋学者でケンブリッジ大学教授であった故エドワード・G・ブラウンは一八九〇年バハオラをバーヂに訪問し、その印象を次の如く記している。

「私の案内者は、私が靴を脱ぐ間暫時立停っていた。それから手をすばやく動かしてカーテンを引き、私に通ってしまうとそのカーテンを元通りにした。すると私は広い部屋に入っていた。その部屋の上手の一方には低い長椅子があり、扉と反対側には二三脚の椅子が置かれてあった。私はどこへつれてゆかれるのか、誰に会えるのかと、かすかにうたがっていたが（何故なら何んの確言も与えられていなかった）、やがて一分か二分たった頃、ぞっとするような気がしてこの室に誰かいることにはっきり気付いた。長椅子の端が壁に接している隅の所に、不思議な、そして神々しい姿の人物がイスラム教の托鉢僧によってターチュと呼ばれる（しかし普通のとちがった高さで形をした）種類の頭巾を冠って腰かけていた。その頭巾の裾のまわりには白い小さなターバンがまとわれていた。私が熟視した彼の顔は描写する事はできないが決して忘れ得ない顔であった。輝やくその眼は何人の心をも読むが如くであった。力と權威とがその大きな額に備わっていた。額や頬には深いしわがあるけど、黒い頭髪や、ほとんど胸まで房々とおおっている鬚は、歳をあざむくばかりであった。私はその人の前に身を屈めた時、それが誰の前であるかをたづねる必要はなかった。その人こそ王達も羨やみ帝達も徒らに嘆息する程の、愛と熱誠の目標であったかの人であったのである。優しいが威厳のある声が私にすわるように命じた。それから、次のように言われた。『貴下の到

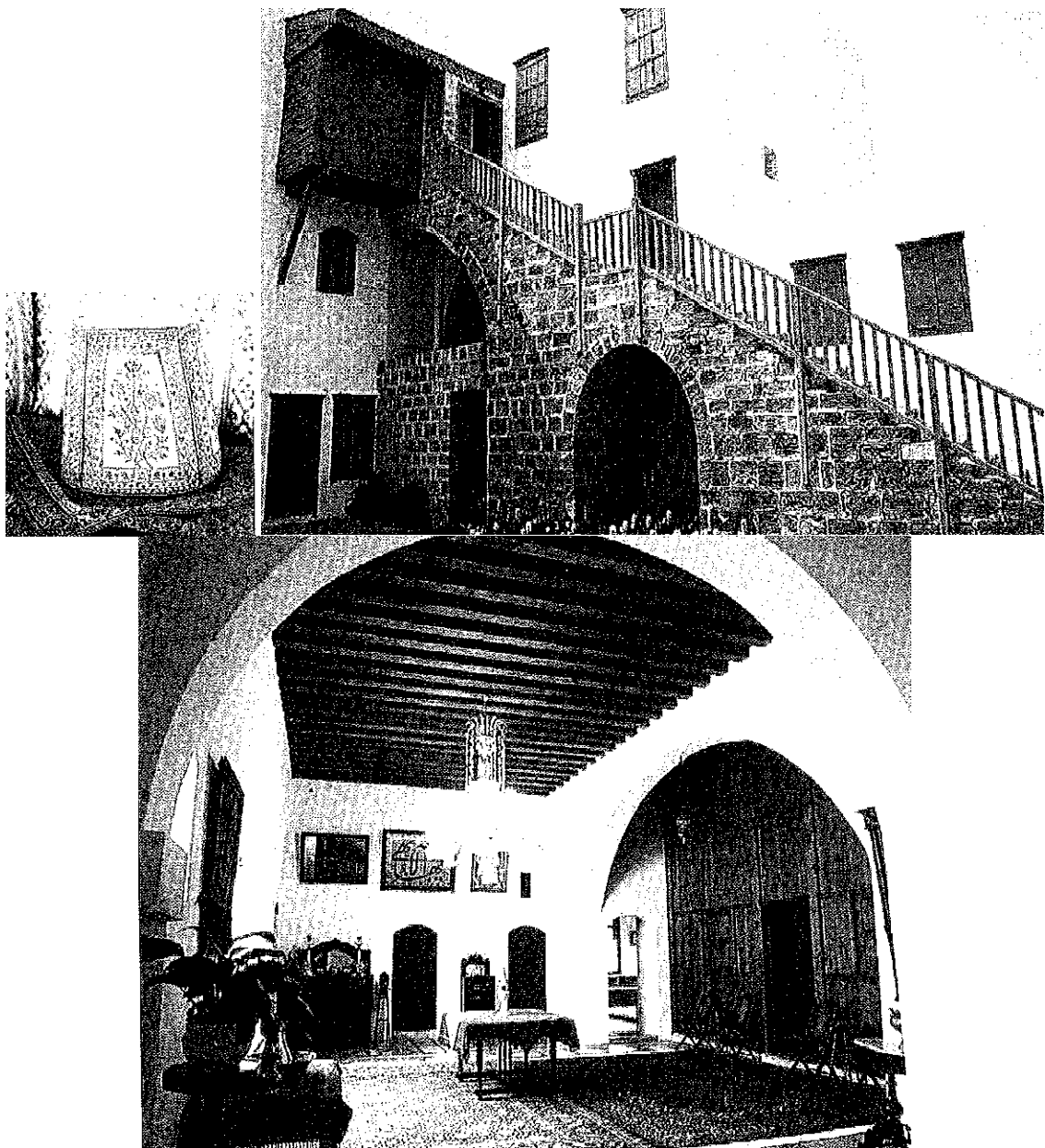
来を神に感謝します……貴下は囚人にして流刑者である者に会いに来られた。……我々はただ世界の利益と、国々の幸福とを願うばかりです。しかも彼等是我々をもって暴動の煽動者とみなし、その罪、禁錮追放に値するものとした……すべての国々が信仰において一体となり、すべての人々が同胞として一体となること、人々の間に親愛と和合のきずなが強化されること、種々な宗教の多様性が消滅し、人種の差別がなくなることで、これ等のことのどこに害がありましょう。……しかし、それは必ず実現されるでしょう。これら無益な闘争や破壊的な戦争はなくなり、やがて最大の平和が必ずや来るであろう……貴下もまたヨーロッパでこれを必要としませんか。これはキリストが予言したことではありませんか。……しかも我はヨーロッパの諸王や支配者等が人類の幸福のためよりも、人類の破壊のためにより自由に財宝を費しつつあるのを見るではありませんか。……これ等の闘争や流血や不和はやめられねばなりません。そうして全人類は一族、一親族の如くならねばなりません。誇りは自国を愛する者にあるのではなく、人類同胞を愛する者にあるのです。』

私がバハから、そのとき聞いたことは他にも色々あるが、以上が私の記憶する限り、その時の言葉である。これ等の言葉を読む人々をして自ら熟慮せしめよ、このような教義が束縛や死に値するかどうか、又、世界はこれらの言葉の普及によって利益を得るか、また損失を招くか、と云うことを。」

——『旅人の物語』の序文、バブの挿話』三九頁

アブラ・パシャの家

アッカ市の提督であったアブラ・パシャによって 1810 年代に建てられた石造りのお城のような家でアッカ市内にある。アブラ・パハの家族は 1896 年から 1910 年までの 14 年間住まわれた。バブの殉教から 50 年たった 1899 年にバブの遺体を収めた木の棺が密かにイランから何ヶ月もかけてアッカのアブラ・パシャの家に運び込まれた。バブの遺体の収められた棺は 1909 年にバブの霊廟が完成されるまでここに保管された。守護者ショーギ・エフェンディもこの家で誕生された。1898 年にアメリカの最初の巡礼団が来たとき、アブラ・パハは巡礼団とこの建物で会っている。イシカバードの最初の礼拝堂の建設や、バブの家の再建計画の指示はアブラ・パハがこの家から出していた。ローラ・クリフフォード・バーニイはこの家でアブラ・パハにいろいろな質問をして、それをまとめあげて「質疑応答集」を完成させた。この様にいろいろの出来事に満ちたこの家は 1975 年にバハイの手に戻り、ルヒヤ・カヌームの指揮の下で昔の面影に近い調度品が配備された。



カルメル山



イスラエルの北西部、地中海に面したハイファ市内にある小高い山。この山はその昔から「主の山」として知られている。この山は、ユダヤ教及びキリスト教にとっても神聖な山で、バハイ教にとっても神聖な山。ここはバハイ教の精神的及び行政的中心地。バハオラはカルメル山の書簡に“やがて神は神の箱船を汝の上に漕ぎ出すであろう、そして、名称の書に述べられたバハの人々に明らかにするであろう...”と述べている。守護者はこの文を解釈して、“神の箱舟とは神の掟のことで、箱舟を汝の上に漕ぎ出すという意味は万国正義院の設立を意味する”と述べている。このカルメル山の中腹の

斜面にバハイ世界本部である万国正義院、国際史料館、国際布教センター、聖典研究センターと、神の顕示者バブの霊廟とその霊廟をはさんで上段と下段合わせて1キロメートルにおよぶテラス式庭園、アブドル・バハの霊廟などが建てられている。カルメル山の麓にはアブドル・バハの家、旧西洋人巡礼館、ルヒヤ・カヌームの墓所などがあり名実共に世界本部である。特に、金色のドームをもつバブの霊廟と上下1キロメートルに及ぶテラス式庭園はバスや乗用車で市内に入る前から直ぐに目に入ってくる光景で知られている。カルメル山の頂上近くにはバハイの礼拝堂用地があり、今は、その場所を示すモニュメント（石塔）が建てられているが、やがては、そこに礼拝堂が建てられる予定である。海岸の大通りに近いところには、バハイ墓地がありハイファで亡くなられた人たちの墓所がある。日本人の藤田さんの墓もある。

ローヘ・カルメル（カルメルの手紙）

この日に賛美あれ。この日こそは、慈悲の芳香が全造物の上を漂った日であり、過ぎ去ったいかなる時代も及ぶことのできない日、そして日の老いたる御方の御顔が彼の聖なる座へ向けられた日である。ここに全創造物の、そしてその彼方からは天上の群集の高らかに叫ぶ声が聞かれた。「急げ、おおカルメルよ。見よ、名の王国の統治者にして天の造物主なる神の御顔の光は汝の上に投げかけられた故に。」

歓喜に我を忘れ、カルメルは声高らかに叫んだ。「私の命があなたへの犠牲とならんことを。なぜなら、あなたは私を見つめ、あなたの恩恵を授け給い、あなたの歩みを私の方へ向け給うたが故に。おお、永遠の生命の源なる御方よ、あなたからの隔離で私はもはや焼き尽くされ、あなたのおそばから遠く離れることにより私の魂は焼き尽くされてしまいました。あなたに賛美あれ。なんとなれば、あなたの呼び声に私の耳を傾けさせ、あなたの足音で私に栄誉を授け、あなたの日から漂う生命を与える芳香と、あなたの民の間であなたのラッパの音と定め給うたあなたのペンのかん高い声により、私の魂を活気づけ給いました故に。そして、あなたの抵抗できない信教の啓示の時がやって来ると、あなたはあなた

の精神の息吹をそのペンに吹き込まれました。すると、見よ、全創造はまさにその基盤より揺り動かされ、全創造物の所有者なる御方の宝庫に隠されていた神秘は人類に明かされたのです」。

カルメルの声はその最も崇高なる場所へ届くやいなや、我はこう応えた。「汝の主に感謝せよ、おおカルメルよ。わが存在の海が汝の面前でうねり、汝の眼と全創造の眼を慰め、全てに見えるものと見えないものを喜びで満たした時、我よりの隔離の炎は汝を焼き尽くしつつあった。この日、神は汝の上に神の玉座を確立し、汝を神の印の黎明の場となし、神の啓示の証拠の曙となし給うた。それ故、大いに喜べ。汝の周りを巡り、汝の栄光の啓示を宣言し、汝の主なる神より汝に与えられた、溢れんばかりの恩恵について述べる者は幸いである。栄光に満ち給う汝の主の名において不滅の聖杯をつかみ、主に感謝せよ。なぜなら、主は汝への慈悲の印として汝の悲しみを喜びに変え、汝の嘆きを転じて至上の歓喜へとなし給うたのであるから。まことに主は、御自身の玉座を据え、主の足が踏み入れられ、主の来訪によって栄誉を与えられ、主が呼び声をとどろかせ、主が涙を流し給いしこの地を愛される。

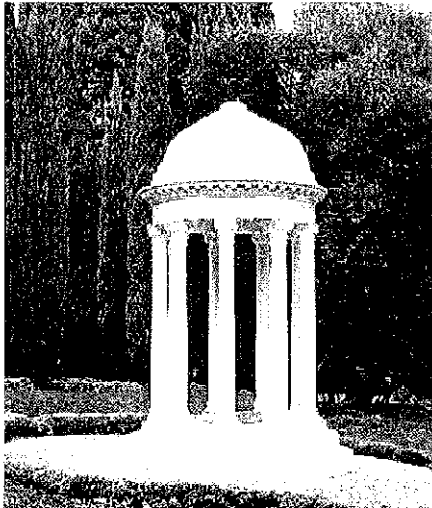
「おお、カルメルよ、シオンに呼びかけ、吉報を告げよ。人類の目から隠されていた御方は今や出現した！すべてを征服する彼の主権は現され、すべてを包みこむ彼の光輝は明示された。ためらったり、立ち止まったりすることなきよう注意せよ。急ぎ行きて、天より降りてきた神の都の周りを駆け巡れ。この神の都とは、神の寵愛を受けた人々、心清き人々、そして最も崇高なる天使の集合が崇敬にその周囲を駆け巡った天のカーバである。おお、この啓示の吉報を地上のあらゆる場で告げ、その一つ一つの都市にあまねく伝えることを我は切に願う。この啓示にシナイの心は魅惑され、この啓示の名において燃える柴はこう叫んでいる。「天と地の王国は、主の中の主におわす神に属す。」まことにこの日こそは地と海とがこの吉報に歓喜する日である。そして、人間の知性や心の理解力を超える恩恵をもって神が啓示のために定め給うたものは、この日のために蓄えられてきたのである。やがて神は、汝の上に神の箱舟を走らせ、名称の書で述べられたバハの人々を現されるであろう」。



全人類の主は神聖なり。主の名が述べられるやいなや、地上のすべての原子は震動し、壮大なる舌は、主の知識に包まれ、主の威力の宝庫に隠されていたものを明かされたのである。まことに彼こそは、強大にして力に満ち、最も高遠なるその御名の力によって天と地にある全てのものを統治し給う御方なり。

モニュメント・ガーデン

万国正義院の建物の前方の階段を下りた所に聖なる家族の墓のあるモニュメント・ガーデンがある。ここでは、アブドル・バハの妹であり、アブドル・バハの亡き後、守護者ショー・ギ・エフェンディを支えてバハイ信教を守ったバヒヤ・ハヌーム（最大の聖なる葉）、バハオラの妻であり、バハオラと一生苦難を共にしたナヴァーブ、アブドル・バハの弟でアッカの牢獄の明り取り窓から転落して亡くなった「最も聖なる枝」、アブドル・バハの妻ムニレ・ハヌーム（聖なる母）の4名の墓がある。



最大の聖なる葉のお墓



最大の聖なる葉



最も純粋な枝



最も純粋な枝とナヴァーブのお墓



ムニレ・ハヌームのお墓

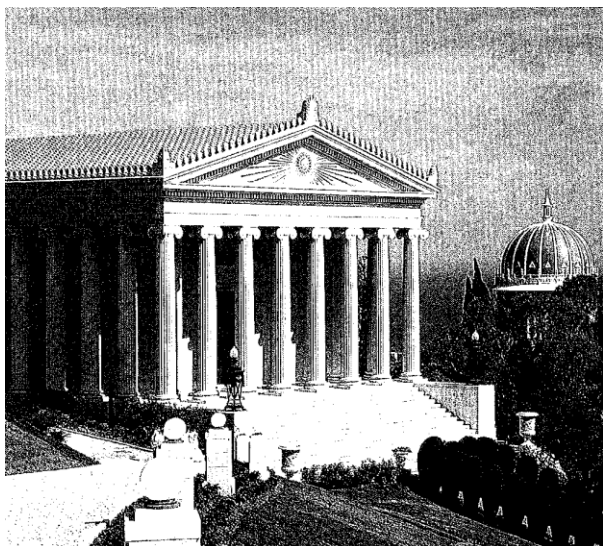
最大の聖なる葉（バヒヤ・ハヌーム） アブドル・バハの妹

最も純粋な枝（ミルザ・ミッディ） アブドル・バハの弟

ナヴァーブ （バハオラの奥様）

ムニレ・ハヌーム （アブドル・バハの奥様）

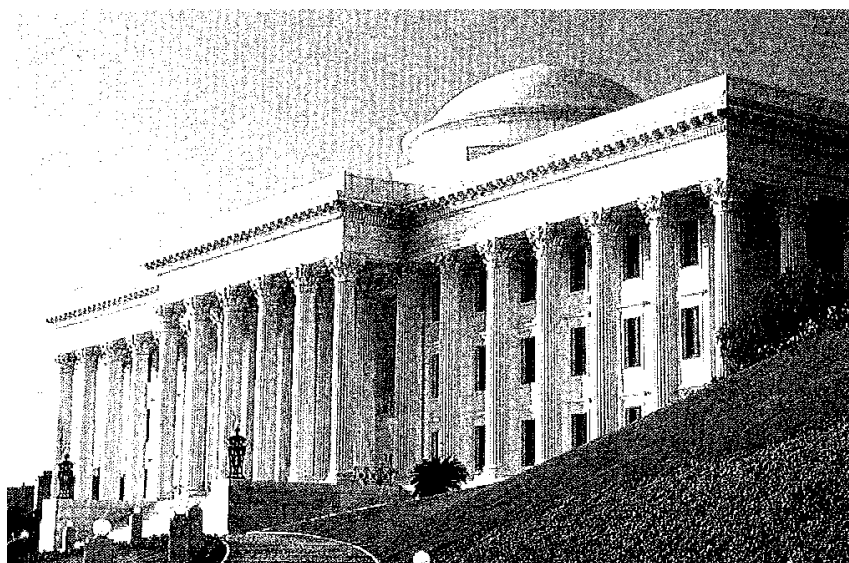
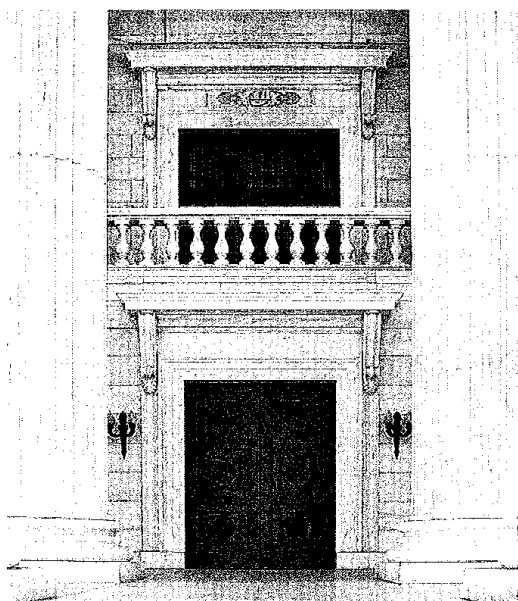
国際史料館 建物



国際資料館は、アークの建物の一つで、カルメル山の中腹に建てられている。この資料館の中には、バハイの歴史に関係ある大切な史料が保存されている。中でも大事なものは、バブとバハオウの肖像画と写真である。それに、バブやバハオウ自身の書かれた多数の書簡と、身につけられていた、衣服、手袋、帽子などと、実際に使われた印鑑、すずり、ペンなどである。この国際史料館は手狭になったのでアーク・プロジェクトの一環として拡張工事が行われた。この史料館に入室を許可されるのは、9日間の巡礼を許可された者と、国際大会の代表者だけに限られている。

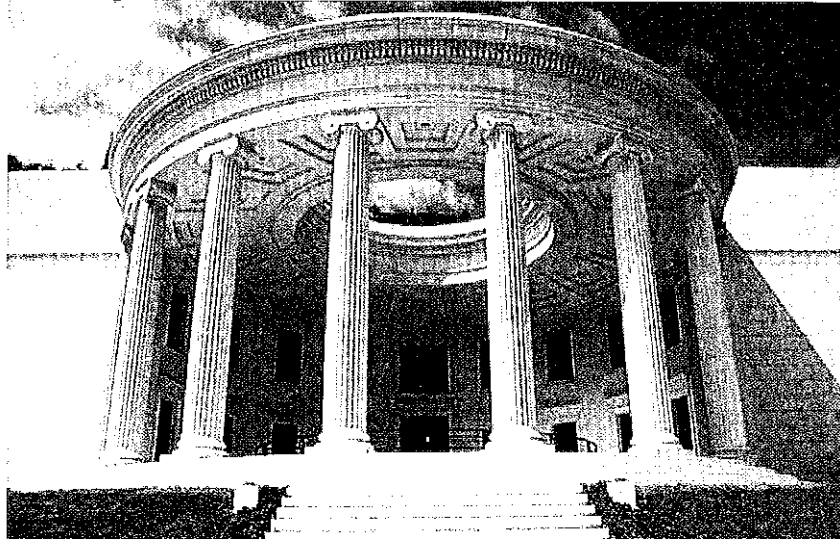
万国正義院の建物

万国正義院はバハイ信教の最高機関であるとバハオウの最も聖なる書「アグダスの書」に書かれている。万国正義院のメンバーはすべて男性でなければならない。万国正義院のメンバーは5年に一度イスラエルのハイファで世界各国の9名の全国精神行政会メンバーによる投票で選ばれた9名のメンバーで構成される。バハオウは万国正義院は不謬であると言われている。万国正義院はバハオウの定めていないすべての事柄について決定することが出来る。万国正義院の建物は地上3階地下2階の建物である。この建物の外壁の周囲にはギリシャの大理石の円柱が立ち並び建物の外壁も大理石が嵌め込まれた美しい建物です。この建物を中心にアーク状に、国際布教センター、聖典研究センター、や国際資料館がある。また、建物の表面階段を下ったところにモニュメント・ガーデンがある。



聖典研究センター

万国正義院の建物と国際資料館の間にある。この建物の中で、バハオウの書かれた膨大な書簡及び書物に何が書かれているかを詳細に調べ、新しく発見したことなどを万国正義院に報告する。



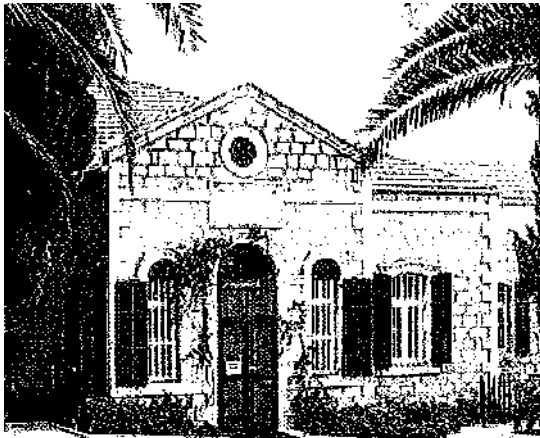
国際布教センター

従来、国際布教センターはアブドル・バハの家の前にある建物が使われていたが、そこは、最初は「西洋人の巡礼の家」と呼ばれていた。1963年に万国正義院が設立されると、その建物は万国正義院の建物として使われていたが、新しい万国正義院の建物が完成し、新しい建物に移った後、国際布教センターがこの建物を使っていた。その後、万国正義院の隣に国際布教センターが完成したのでそちらに移った。この建物は地上2階地下7階と建物全体の殆どの部分が地下にある。

国際布教センターは1973年万国正義院によって設立された。最初の目的は、大業の翼成者がいなくなった後の時代にその任務を引き継ぐ機関として設立された。任務は大陸顧問団と密接な連絡をとり、彼らを激励し、新しい布教目標を設定するとともに、大陸顧問団から得た情報を万国正義院に伝える。国際布教センターは9名の国際顧問によって運営されている。国際布教センターの主な役割は、万国正義院の指示のもと、世界各地にいる大陸顧問を通して世界各地のバハイ信教の布教と保護の仕事の企画、普及、および指導にあたっている。



巡礼の家

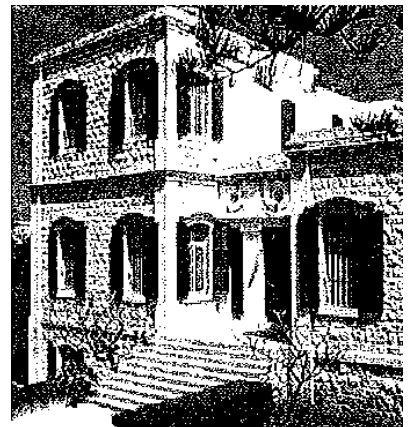


バブの霊廟完成後間もなく、聖地巡礼に来ていたイシカバッドのバハイ、ミルザ・ジャファー・ラーマニが、アブドル・バハに巡礼者の便宜のために巡礼者の家を建てる申し出をし、アブドル・バハはそれを許可した。彼はハイファに残って、巡礼の家の建設を監督し完成し、すべての経費を支払った。アブドル・バハはこの建物が完成したとき、大変喜んで祝賀会を催した。アブドル・バハはラーマニ氏に何か私のしてあげられることはないかと尋ねた。ラーマニ氏はアブドル・バハに、建物完成記念にアブドル・バハの言葉をこの建物に残していただきたいとお願いした。アブドル・バハは笑顔で承諾なすり、紙に「**ここは巡礼者の心温まる宿泊所です。この宿泊所はミルザ・ジャマル・ラーマニにより 1909 年に設立**」と書かれた。この言葉は、建物の入り

り口のすぐ上の石に彫られていて、今でも見ることが出来る。この建物は、アブドル・バハによる巡礼者たちとの会見や講演会などにしばしば利用された。また、守護者ショージ・エフェンディもこの建物で巡礼者との会見に使っていた。この建物は、バブの霊廟の側面入り口から入って真っ直ぐにつき当たった所にある建物。最初この建物は、イランやイラクなどから訪問された巡礼者の宿泊場所に使われていた。巡礼の家からの眺めについて、アブドル・バハは、次のような言葉を残したとされる－「巡礼の家からの眺めは素晴らしい。特にそれはバハオウの祝福された廟に向かっている。将来、アッカとハイファはしっかりと手をつなぎ、一つの強大なメトロポリスの二つの拠点となろう。ここから眺めると、世界でも最初の巨大な商業複合施設になる光景が見えてくる。この巨大な 半円形の湾は、最高に美しい港となり、あらゆる国の船がそこに停泊するであろう。諸国の船がやってきて、世界中の人々、何千人もの男性女性をその波止場に降ろすであろう。山と平原には近代的な建物や邸宅が立ち並び、産業が発達し、博愛的な機関が設立されるであろう。世界中の文明と文化という花がもたらされ、その香りが混合され、人類同胞愛を燃え盛かすであろう。素晴らしい庭園や果樹園、森林や公園があらゆる方向に現れるであろう。夜には、町に電気で明かりが灯され、アッカからハイファまで一続きの明かりの道ができるであろう。カルメル山の両側には巨大な探照灯が設置され、蒸気船の導きとなる。カルメル山そのものが、山上から麓まで、光の海に浸されるであろう。山上に立つ者、またそこへ向かう蒸気船の乗客らは、全世界で最も荘厳で威厳に満ちた光景を見るであろう。山のあらゆる地点から、『ヤーバハオルアブハ』の交響曲が聞かれ、夜明け前には、魂を揺さぶる音楽が旋律あふれる歌声と共に、全能者の玉座へと奏でられるであろう。」

アブドル・バハの家

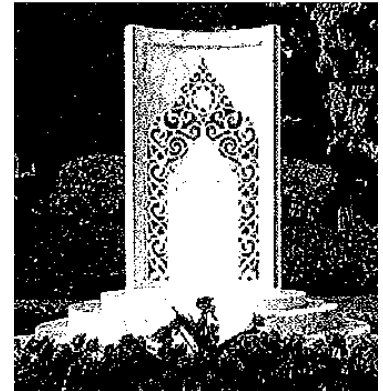
アブドル・バハはバブの霊廟建設に情熱を燃やしていた。そのためには、足がかりとなる自分の住居を建てたいと思っていた。この話を聞いたジャクソン夫人が建設資金の提供を申し出た。早速、バブの霊廟建設予定地に近いところに土地を購入した。アブドル・バハは、早速、アブドル・バハの家の設計をされた。この家は 1908 年に完成したが、当時、アブドル・バハはアッカ市外に出られない軟禁中であったので、家族の者たちだけが新しい家に移り、アブドル・バハ自身は 1910 年になってやっとこの家に移転した。その後はこの家は (House of the



Master) アブドル・バハの家と呼ばれるようになった。アブドル・バハがヨーロッパやアメリカ訪問から帰った後は、外国からの巡礼者のリセプションの場所としても使われた。日本の文豪徳富蘆花が 1919 年にアブドル・バハを訪問したのもこの家であった。アブドル・バハのアブハ王国への他界後は、ショーギ・エフェンディによって増築された。1957 年からルヒヤ・カヌームがこの家の主人となりルヒヤ・カヌームの客人の接待などに使われていた。ルヒヤ・カヌームが亡くなられた時は、この家の広間で葬儀が行われた。

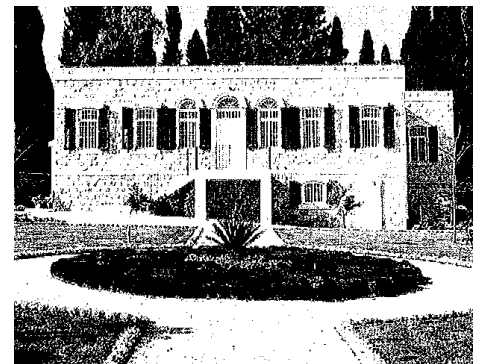
ルヒヤ・カヌームの墓所

1937 年守護者ショーギ・エフェンディと結婚され、守護者存命中は守護者の書記を勤められ、1952 年に大業の翼成者になられる。1957 年に守護者がなくなられた後は、守護者の意志を継いで世界各国を廻り日本にも 2 度来日されている。その後は、国際布教センターのメンバーとして高齢にもかかわらず活躍された。2000 年 1 月 19 日、聖地のアブドル・バハの家で没す。葬儀には万国正義院メンバー、国際布教センターメンバー、大陸顧問、世界各国の全国精神行政会の代表者、などが参列した。ルヒヤ・カヌームの遺体はアブドル・バハの家の前の庭園に埋葬された。

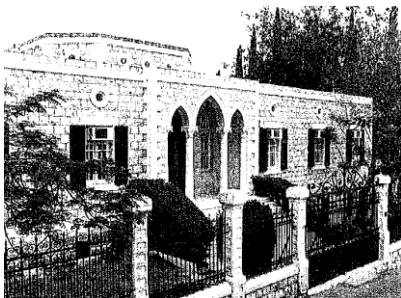


ハパルシム通り 10 番

これはバハオラがかつてテントを張られた場所で、後にアブドル・バハの指揮により建物の建設が開始され、守護者の時代に完成した。当初、この建物は西洋人の巡礼の家として使われたが、1951 年にはバハイ国際評議会の建物となり、1963 年から 83 年までは万国正義院の建物として使われた。1983 年から 2000 年までは国際ティーチングセンターの建物となり、現在はバハイ国際共同体とその関連機関の事務所となっている。



ハパルシム通り 4 番



アブドル・バハが欧米訪問から戻られてしばらくの間、この建物は西洋人巡礼の家として用いられ、アブドル・バハが西洋人巡礼者をここで迎えられた。アマトルバハ・ルヒヤ・ハヌームによると、彼女と母親は、アブドル・バハのご逝去後、ここに滞在したということである。また、彼女が敬慕する守護者と会ったのも、この建物である。



テラス式庭園

バブの霊廟の上方と下方に広がる各9段、計19段あり、総延長距離は1キロメートルほどある。また、このテラス式庭園の下には2本の道路があり、テラスはこの道路を橋で跨いでいる。このテラス式庭園は2001年5月に正式な開通式が行われた。このテラス開通式には各国から代表者19名が参加を許された。テラスの一番下の段の前方には広い道路の両側にジャーマン・テンプラー・コロニイの特徴ある煉瓦色の屋根の家が並んでいる。その先は海岸通に通じている。テラスの階段の全長は1キロメートル、標高差は225メートルある。そのテラスの中央に金色のドームを戴くバブの霊廟がある。テラス完成以前にもバブの霊廟から海岸通に通じる階段があって「王様の道」呼ばれていた。時来たれば、世界中からこの階段を上ってバブの霊廟に参拝に来るといわれていた。このテラス式庭園はハイファ市が誇る観光名所となっている。

ハイファの礼拝堂用地

カルメル山の頂上近くにある。現在のところ建設予定はたっていないが、やがてはこの地に礼拝堂が建設される。現在この地にオベリスクが建っている。この用地は大業の翼成者アメリア・コリンズ氏によって寄贈された。



「狼の息子への書簡」からの抜粋（アッカに関するイスラム教の伝承）

（これは、アッカに関するイスラム教の伝承で、バハオウが「狼の息子への書簡」という、晩年に書かれた長い書簡の一番最後に引用しておられるものである。1500年前近く前に発された、アラビア語での伝承であり、難解な内容が出てくる。文字通り取ってよいもの、象徴的に解釈するべきものなどがあると思われるが、ここではそのまま掲載してある。また、この部分は、このガイドブックの英語版には収められていないが、同書簡がまだ邦訳されていないため、この場を借りて記載することとした）

憐れみ深く、慈悲深き御方なる神の御名において

アッカとその海そしてアッカにあるアイヌル・バカル（牛の泉）の真価について次のように記されている。

アブドウ・サラムの息子アブドル・アジーズは預言者－神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを－が次のようにおっしゃったと我々に述べている：「アッカはシリアにある町で、神はこの町に特別の慈悲を示し給うた」。

イブネ・マスード－神が彼をお気に入りとなされますように－はこう述べている：「預言者－神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを－はこうおっしゃった：『すべての海岸のうち最高のものはアシュケロンの海岸である。そしてアッカはまことに、アシュケロンよりもすばらしく、アッカの真価がアシュケロンとその他すべての海岸のそれよりも優れていることは、ムハムマドの真価が他のすべての預言者のそれよりも優れているのと同じである。我は、シリアの二つの山の間にある町の知らせを伝える。それは牧草地の真ん中にあるアッカという町である。まことに、その町を切望し、訪問したいと願って訪れる者には、神はその者の罪を許し給う、過去と未来の両方の罪を。そして巡礼者以外としてその町を出る者について、神はその出発を祝福されない。そこには、牛の泉という泉がある。そこから取って飲む者には、神はその心を光で満ちし、復活の日の最大の恐怖から守り給う。』

マリク－神が彼をお気に入りとなされますように－の息子アナスはこう述べている：「預言者－神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを－はこうおっしゃった：『海岸沿いに町がある。玉座の下に吊り下げられたアッカという町である。崇高なる方におわす神の報いを待って確固不動としてそこに住む者には、神は復活の日まで、償いを書き記し給うであろう。それは、忍耐強くあり、立ち上がり、神の前にひざまずき、ひれ伏した者らの償いである。』

そして彼－神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを－はこうおっしゃった：「我は汝に白い海岸沿いの町について告げる。その白さは、崇高なる方、神のお気に入りである。それはアッカと呼ばれている。その町で一匹の蚤に噛まれる者は、神の目においては、神の道において大きな痛手を被る者よりも良い。またその町で祈りの呼び声を上げるならば、その声は樂園に届くであろう。その町において、敵の前で7日間滞在する者を、神はケズル－彼に平穩あれ－と共に呼び寄せ、復活の日の最大の恐怖から彼をお守りになろう。」そして彼－崇高なる方、神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを－はこうおっしゃった：「樂園には王や王子たちがいる。アッカの貧者たちは樂園の王、王子たちである。アッカでの一か月は、その他の場所の一千年よりも優れている」。

預言者－神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを－はこうおっしゃったと伝えられている：「アッカを訪れた者は幸いである。そして、アッカを訪れたものを訪れる者は幸いである。牛の泉から飲み、その水で身を清めた者は幸いである。なぜならば、黒い瞳の乙女たちは樂園の樟脳から飲むからである。それは、牛の泉、サルヴァン（シローム）の泉、ザムザムの泉から来るものである。これらの泉から飲み、その水で身を清めた者は幸いである。なぜならば神は、復活の日に、地獄の火がその者とその身体に触ることを禁じ給うたからである。」

預言者 – 神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを – はこうおっしゃったと述べられている：「アッカには、義務を超えた行い、有益な行為がある。神はそれらをお望みになる者には誰でも特別に授け給う。そして、アッカで次のように言う者には、神は一千の善行を書き記し給い、一千の悪行を消し給い、樂園において一千の段階を引き上げ給い、罪を許し給う – 『神に栄光と賛美あれ。神の他に神はいまらず、神は最も偉大なり。崇高にして強大なる方、神の他に、力や強さは存在せず』。また、アッカで『神に許しを懇願す』と述べる者には誰でも、神はそのすべての罪を許し給う。またアッカで朝と夕べ、夜中と夜明けに神を記憶する者は、神の目においては、崇高なる方、神の道において剣と槍と武器を持つ者よりも優れている」。

神の使徒 – 神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを – はまたこうもおっしゃった：「夕べにその海を見、日没に『神は最も偉大なり』と言う者には、神はその罪を許し給う、たとえそれが砂の山のように積み上げられていても。そして波を四十回数えながら『神は最も偉大なり』と繰り返す言う者には、崇高なる方、神は過去未来の罪を許し給う」。

神の使徒 – 神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを – はこうおっしゃった：「夜通しその海を見る者は、ルクンとマカムの間で丸二か月を過ごす者よりも良い。その海岸で育てられる者は、その他のいかなる場所で育てられた者よりも良い。その海岸に横たわる者は、他の場所で立っているようなものである」。

まことに、神の使徒 – 崇高なる方、神の祝福とその挨拶が彼の上にあらんことを – は真実を語った。

List of Sources

From the Writings of Bahá'u'lláh

- Epistle to the Son of the Wolf* (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1988).
The Kitáb-i-Aqdas: The Most Holy Book (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1993).
Prayers and Meditations by Bahá'u'lláh (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1987).
Tablets of Bahá'u'lláh Revealed after the Kitáb-i-Aqdas (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1988).

From the Writings of Shoghi Effendi

- Citadel of Faith: Messages to America, 1947–1957* (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1980).
God Passes By (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1987).
Messages to the Bahá'í World, 1950–1957 (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1971).
This Decisive Hour: Messages from Shoghi Effendi to the North American Bahá'ís, 1932–1946 (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 2002).

From the Universal House of Justice

- Messages from the Universal House of Justice, 1963–1986* (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1996).

Other sources

- Amatu'l-Bahá Rúhíyyih Khánúm, "The Completion of the International Archives" in *The Bahá'í World*, vol. XIII, 1954–1963 (Haifa: Bahá'í World Centre, 1970), pp. 402–434.
- Bahá'í International Community, Office of Public Information, *Mountain of the Lord* (London: Bahá'í Publishing Trust, 1987).
- Bahá'í News* (Wilmette: The National Spiritual Assembly of the Bahá'ís of the United States), No. 625.
- Bahíyyih Khánúm: The Greatest Holy Leaf*, comp. Research Department Bahá'í World Centre (Haifa: Bahá'í World Centre, 1982).
- Browne, E. G., Introduction to *A Traveller's Narrative: Written to Illustrate the Episode of the Báb* (Amsterdam: Philo Press, 1975).
- Esslemont, J. E., *Bahá'u'lláh and the New Era*, 5th rev. ed. (Wilmette: Bahá'í Publishing Trust, 1990).
- "The House of 'Abdu'lláh Páshá" in *The Bahá'í World*, vol. XVI, 1973–76 (Haifa: Bahá'í World Centre, 1978), pp. 103–106.
- Taherzadeh, Adib, *The Revelation of Bahá'u'lláh*, vol. 4, 1877–1892 (Oxford: George Ronald, 1988).

References

1. *Kitáb-i-Aqdas*, par. 137.
2. *ibid.*, par. 6.
3. *Messages to the Bahá'í World: 1950–1957*, p. 30.
4. *Bahá'í News*, January 1966, no. 418, p. 4.
5. *Citadel of Faith*, pp. 95–96.
6. *God Passes By*, pp. 274–275.
7. *ibid.*, p. 273.
8. *ibid.*, p. 276.
9. *ibid.*, pp. 275–276.
10. *ibid.*, p. 276.
11. *Citadel of Faith*, p. 95.
12. *God Passes By*, p. 312.
13. *ibid.*, p. 313.
14. *ibid.*, p. 313.
15. *ibid.*, p. 346.
16. *God Passes By*, p. 106.
17. *ibid.*, p. 186.
18. *ibid.*, p. 182.
19. *ibid.*, p. 183.
20. *Bahá'u'lláh and the New Era*, pp. 33–34.
21. *God Passes By*, p. 185.
22. *ibid.*, pp. 186–187.
23. *ibid.*, p. 188.
24. *This Decisive Hour*, sec. 64.9.
25. *Prayers and Meditations by Bahá'u'lláh*, sec. XXX.
26. Shoghi Effendi to a National Spiritual Assembly, dated 2 March 1951.
27. *God Passes By*, p. 213.
28. *ibid.*, pp. 192–193.
29. *The Revelation of Bahá'u'lláh*, vol. 4, pp. 15–16.
30. *Bahá'u'lláh and the New Era*, p. 35.
31. Shoghi Effendi to a National Spiritual Assembly, dated 15 December 1950.
32. *Messages from the Universal House of Justice, 1963–1986*, sec. 127.
33. *ibid.*, sec. 264.3.
34. *Bahá'u'lláh and the New Era*, pp. 39–40. See also the Introduction to *A Traveller's Narrative*, pp. xxxix–xl.
35. *Messages from the Universal House of Justice, 1963–1986*, sec. 154.
36. *God Passes By*, p. 194.
37. *Tablets of Bahá'u'lláh Revealed after the Kitáb-i-Aqdas*, pp. 3–5.
38. *This Decisive Hour*, sec. 63.1.
39. *God Passes By*, p. 348.
40. *This Decisive Hour*, sec. 64.8.
41. *Bahyyih Khánum: The Greatest Holy Leaf*, p. v.
42. *ibid.*, pp. 3–4.
43. *ibid.*, pp. 8–9.
44. *God Passes By*, p. 347.
45. *ibid.*, p. 188.
46. *This Decisive Hour*, sec. 64.10.
47. *ibid.*, sec. 64.12.
48. *God Passes By*, p. 348.
49. *ibid.*, p. 108.
50. *This Decisive Hour*, sec. 64.13.
51. *ibid.*, sec. 64.16.
52. *ibid.*, sec. 39.1.
53. *Messages to the Bahá'í World*, p. 64.
54. *The Bahá'í World*, vol. XIII, pp. 402–434.
55. It was later decided that the stone would come from Greece and be carved in Italy; the sixty columns of the original plan were reduced to fifty-eight.
56. *Messages from the Universal House of Justice, 1963–1986*, sec. 164.
57. *ibid.*, sec. 354.1.
58. Universal House of Justice to an individual, dated 17 November 1999.
59. Universal House of Justice to the Bahá'ís of the world, dated 31 August 1987.
60. *Bahá'u'lláh and the New Era*, pp. 250–251.
61. Universal House of Justice to the Bahá'ís of the world, dated 19 January 2000.
62. *Epistle to the Son of the Wolf*, p. 145.
63. Shoghi Effendi to the Bahá'ís of the East, dated Naw-Rúz 108.
64. Universal House of Justice to all National Spiritual Assemblies, dated 4 January 1994.
65. Universal House of Justice on the occasion of the official opening of the Terraces of the Shrine of the Báb, dated 22 May 2001.
66. *Messages to the Bahá'í World*, p. 63.
67. *Messages from the Universal House of Justice, 1968–1973*, pp. 83–84.